

『成城文藝』第二百号発刊を祝す

古代ギリシアで、いつごろに自分の論考を書物の形に纏めるようになったのかは（この場合、詩人の作品は除外する）、それほど明白ではないが、これまでの研究成果を眺めると、最初の者としてイオニア自然哲学者の誰かの名を挙げるのが妥当なところとなる。そうすると紀元前6世紀の頃には、哲学的思考を書き綴った本というものが初めてギリシア世界に現れたことにならうか。しかし、その頃に本の流通といったことがあったとも考えられず、ゆえに「書く」ことの目的が、少なくともそれで自分の論考を世間に知ってもらうことではなかったのは確かだろうし、いわんや糧を得るためであったはずもない。 *causae rerum* についての自説を、仲間に加えようと用意されていたのは口演会のような場であつたらう。そういった場での発表の覚え書きとして、本（自分の考えを文字化したもの）が準備されたのかもしれない。自己の新奇な考えが口演会に集まった聴衆を唸らせたなら、口演者はそのことを神に感謝し、自説を本にして奉納しようだ（覚え書きをそのまま奉納したのか、体裁よく書き改めたのかは知らない。こうして神殿に奉納され保管された本が後代へと伝わっていった。

思うに、紀要とは古代ギリシアの最初期の「本」と似ていなくもない。我々は、日々、教室を口演会場として、日頃の研鑽の成果を学生に伝え、教室を深い感動の場にしようと、そういう気概で授業の準備に励んでい

る（その準備にこそ、教育と研究の一体化が認められる）。授業のノートが核となり、珠玉の論文に結晶化する（その準備にこそ、教育と研究の一体化が認められる）。授業のノートが核となり、珠玉の論文に結晶化することは大いにあり得る。そのような出自の論文が紀要を飾っている。我々から神々への感謝は失われたが、かわりに、研鑽の結晶体を紀要に載せることによって、口演会場を教室の外へと拡大し、文芸学部の教室で展開されてきた教育を世間に伝えてきた。それが『成城文藝』である。

成城大学文芸学部が創設されて今年で五十三年目を迎える。創設年（昭和二十九年）の十月には『成城文藝』第一号が発行されている。それから季刊四回発行の原則を遵守しながら、今回二百号という節目の号を発刊することになった。この間、『成城文藝』が学部の教育を社会に伝達する場として、その役目を十全に果たしてきたことは、我々のよく知るところであり、またこの紀要の上で展開されてきた論考の多くが学界に限らず、広く社会に刺激を与え、文芸学部の名を高めることに貢献してきたことも、我々が共通に持つ認識である。二百号には多くの同僚から論文が寄稿されたと聞く。その一つ一つが、文芸学部の教育・研究の健全なる現状を語り、『成城文藝』創刊号の後記にある「文芸研究の新風を世に送る」に値する論考であることを信じて疑わない。この記念号が二十五年後の三百号記念号発刊の原動力とならんことを心から願っている。